

会計実務検定試験テキスト『財務諸表分析・五訂版』 の精神と試験の今後

—新・会計実務検定試験導入によせて—

一橋大学名誉教授・帝京大学教授 新田 忠誓

新しい高等学校学習指導要領により、新科目として「財務会計Ⅱ」と「管理会計」が導入されることになりました。これに伴い、会計実務検定試験「財務会計論」は名称を変更し、「財務会計」とされますが、「財務諸表分析」はそのままの形で残ることになりました。現在、財務諸表分析の指導をされておられる先生方には、これまでどおりの指導法をしていただければと思います。平成27年度からの会計実務検定試験の在り方については、全商のホームページ等で公表されています。この試験制度の改訂は、教育哲学に関わり、「財務諸表分析」検定試験の今後にも関わりますので、最初に、残った財務諸表分析の立場から若干のコメントをしておきたいと思ひます。

会計実務検定試験「財務会計論」導入の趣旨を振り返りますと、時代に合った高度な財務会計の知識を習得させることを第一の目的とするものの、狙いの本音は日商1級、全経上級合格を目指すものでした。したがって、連結財務諸表、キャッシュ・フロー計算書を必ず出題しました。また、そのためのテキストも作成しました。いわば日商1級、全経上級への繋ぎといえます。一方、これからの会計実務検定試験「財務会計」と「管理会計」は教科書がバイブルになります。つまり、教科書に基づいた指導が必要となり、試験問題も教科書から逸脱することはできなくなると予想されます。この点、これまでの「財務会計論」試験の本音の部分は大幅に後退すると思われる。経済社会を扱う教科書が日商・全経など外部の試験を意識するとは思えませんから。この点に関し、『財務会計Ⅱ』の教科書の中に、財務諸表分析の記述があるかもしれません。「会計実務検定」の導入当時、多く寄せられた質問は同じ名称から「テキストは『会計実務』の教科書ですか？」というものでした。ご存知のように『会計』には載っていましたが、『会計実務』では財務諸表分析

を扱っておりません。

『財務会計Ⅱ』の中に、財務諸表分析の記述が設けられた場合、この記述と今回改訂した『財務諸表分析・五訂版』（毎年改訂の予定）との関係が問題になります。名前が同じなら内容は同じだろうという見方ができるからです。しかし、それは違います。これも全商のホームページに掲載されていますが、そもそもの会計実務検定試験導入の趣旨・精神は「現代の金融化された世界に生きる会計的センスと能力の陶冶」にあります。そして、能力の陶冶のために「財務会計論」が、「センス」の陶冶のために「財務諸表分析」がありました。したがって、導入の際に、全商の元校長先生の中に「簿記ができない（例えば、日商3級を取得していない＜全商なのに、なぜ日商に基準を置くのか理解に苦しみました＞）と、財務諸表分析はできない。」などと言っている人がおりましたが、そんなことはありません。簿記を知らなくてもできます。ですから、商業高校は言うに及ばず、普通高校、大学さらに一般へと受験層は問わないことになっているのです。商業高校では、簿記学習の目標、つまり簿記学習が将来どのように役立つかを示す道標（商業高校での学びにより、こんな素晴らしい事ができる事実を可視化する手段）と位置づけても良いし、簿記学習の応用と考え、会得した簿記能力の一つの利用の側面と考えても良いと思ひます。執筆者として常に考えていることは「動物園に行って、動物を見なければ、動物は分からない」という哲学です。兎に角、現実の企業を見て欲しいという願ひを持っております。

「会計的センス」とは具体的には何か？これについては、テキスト巻末の本検定試験の過去問を見て下さい。例えば、第5回では【4】問の、ケーキ屋経営の例、第4回では【4】問の、ラーメンチェーン店の例などがそうです。会計の視点で経営の仕方を考えてもらっています。企業経営のいわゆる計数

的センスともいえるでしょうか、会計の立場から企業家として必要なセンスを会得してもらおうという意図に則って出題しております。正に‘商業’教育ではないでしょうか。

ところで、先程の本試験の精神で「現代の」と表記しましたが、テキストは常にアップデートしています。会計にかかる基準や規則は毎年改訂されています。テキストは常にこれを取り入れております。この点、日頃、報告書作成をはじめとして上からの課業に忙殺されている先生には、最新の情報源として最適と信じています。これが教科書と違う所といえましょう。教科書には検定制度があり、結果、硬直化する嫌いがあります。本テキストは時代を追い毎年改訂しています。教科書会社としての実教泣かせといえるかもしれませんが、編修部の厚意で、テキストの精神を活かしてもらっています。今の、現実の企業そして、その財務諸表が教材です。

大学の教壇に立っていますと、先輩から譲られたとか言って古いテキストを持参する学生がいます。中にはテキストに書かれている事と授業の内容とが違おうと無知をさらけ出し堂々と言ってくる学生もいます。回答は「大学で学び、君が心‘身’ともに生長する（動いている）ように、経済（または社会）は動いている。」と言うくらいでしょうか。

このようなテキストの精神はとくに「第4部 財務諸表分析の実際」に現れています。初版から今度の五訂版までを用意して見てください。初版（一訂版）は、信越化学工業と三井化学、新訂版（二訂版）は、K8 デンキとビックカメラを取り上げました。三訂版は同じK8 デンキとビックカメラでしたが、連結包括利益計算書の導入により財務諸表の体系が変わりました。その後、四訂版は、イオンとセブン&アイ、そして、五訂版は、KDDIとソフトバンクを教材に取り上げています。この流れを見て、お気づきになられた先生もおられると推察しますが、生徒に身近な企業を取り上げるように努力してきました。とくに生徒さんの就職先も意識しています。生きた商業高校教材になりたいという精神からです。ただし、この意図をそのまま続けるかどうかは目下、考慮中です。話題となっている企業を取り上げ、社会と企業に興味を持ってもらった方が良いか、あるいは、例えば、工業と商業というように異業種を取り上げ、その違いを分かってもらった方が良いか、さまざまな教育法が考えられるからです。いずれに

せよ、“最新”の“現実”の企業を教材にするという理念は貫徹します。

会計的センスといえば「金融化された世界」という表現を使いましたが、近年、金融教育の必要性が声高に論じられております。財務諸表分析はこれにも役立ちます。投‘機’家ではなく、健全な投資家つまり投資センスの育成です。若者がしばしば「俺達の時代になったら、年金などももらえない。」という話をします。なら、「どうするの?」。少年老い易く・・・ではありませんが、いずれは働けなくなる年になります。このために自分で資金的人生設計をしなければなりません。そのためには、将来に備えられる投資家の視点で企業を見る眼が必要になりましょう。テキストはこれも扱っています。

財務諸表分析では、上述の精神を貫徹したいと願っているのですが、本分析の試験の未来に一抹の不安を感じています。それは、教科書に基づく「財務会計」試験との間に齟齬が生じないかという懸念です。これまでも教科書依存の簿記検定で問題になった、実務の勘定科目の使い方と教科書のそれとの齟齬のような事象が出てくると危惧しています（例えば、粕谷和生「Q ファイル 財務会計Ⅰの指導上のポイントと留意点」本誌96号を見てください）。つまり、教科書墨守の解答と現実世界の解答との齟齬です。その場合、教科書を取るか財務諸表分析を取るかとなり、検定を翳す文科省体制の下で、教科書の方を選択された時の現実との乖離です。これは嘗て教育現場に立たれた全商トップの裁断になりましょうか。

最後に、財務諸表分析の出張講習についてお話ししておきたいと思います。もし、本財務諸表分析に係る事について大学教員の話を生徒に聞かせたいというご要望がありましたら、遠慮なく申し出て下さい。実教の好意で、編修部に窓口をお願いしました。私以外でも講師の都合さえ付けば、どこへでも出かけます。ただし、遠方の場合には、交通費（宿泊をしなければならぬときは宿泊費）の負担をお願いします。「現代の金融化された世界を生き抜く」ための生徒さんの「会計的センスの陶冶」に協力したいと考えています。官制「ゆとり教育」犠牲者救済の手立てを考えている一国民としての信念の下に！